



校長室だより

No.3

つなぐ

平成30年

6月 1日

校長 阿部修三

求める児童像

○進んで学ぶ子

○思いやりのある子

○がんばりぬく子

薫習（くんじゅう）

先日、テレビで「モラルの欠如」をテーマとした報道がありました。ある河川敷でバーベキューをした大人たちが残り物を近くの景勝記念碑が建つ空き地に捨てていく、あるいはバーベキューの鉄板を川の水で洗ってしまう、もっとひどいことには、近くの神社の「清めの水」で顔や体だけでなく、水着やバスタオルまで洗うといった信じがたい光景でした。

注意するリポーターに対して、大人たちは真顔で言い訳をします。

「なんで俺だけ言うの？みんなやってんじゃない…。ほかの人にも注意しろよ！」

「誰にも迷惑をかけてないじゃない…。うるせえんだよ！」

その言葉からは、微塵の罪悪感も感じられません。見つかったことの運の悪さを嘆いたり、逆ギレして相手を脅すことで、その場を逃れたりしようとする姿に情けなさ、哀れさすら感じます。



「してはいけない」「しない」という規範意識が、欠如している大人がいます。そして、その大人たちは、自分の間違いを知っていながら行動し、指摘されることを極端に嫌う傾向があります。もし、間違いに気づいていないのならどうしようもありませんが・・・。

例えば、立ち入り禁止という看板があるにもかかわらず、誰も見ていないからといって禁止事項を無視する行為・・・。犬の散歩で、他人の家の壁におしっこをかける、公園の草むらの中で、糞をそのままにして立ち去る。

このような光景に共通しているのは、「してはいけない」とわかっていながら違反することです。

これに似た状況は、学校でもよく見かけます。教師の指導の中で、「悪いとわかっていてどうしてするの？」という言葉が出てきます。答えはただ一つ。自分は「しない」という習慣化ができていないのです。

「戒める」という言葉があります。この「戒」の意は、習慣として「しない」ことだそうです。

私たち大人は、子どもに自律的習慣的に「しない」「してはならない」ことを強く、躰（しつけ）として、行動化できるまで徹底的に教え込まなければならないと考えています。その子が社会の中で生きていくためです。

躰や規範意識、モラルは、主に家庭や地域の中で、大人の行いや「ことば」によって培われ教えられること、日々の生活の中で親から子へ、子から孫へと伝え教えられていくものだからです。

仏教の言葉で「薫習」という言葉があります。

「物に香りが染みつくように、人の精神や行いが心の奥底まで影響を与えること」という意味です。

社会のルールや規範意識は、人によって、場によってその善し悪しの判断基準が変わってはなりません。だからこそ、身につけるべきこの時期に、きっちりと身につけさせなければなりません。それも何回、注意や指導をしたからよいというのではなく、まさに「薫習」です。何度も何度も親から子へ、祖父母から孫へ、先生から子どもたちへ伝え、「よい行い、よいしぐさ、よい振る舞い方」を染みつけさせなければなりません。薫習です。

本校の教員は今年度、新しい教科「道徳」の指導の在り方を研究することにしました。

津留小学校453人の可愛い子どもたちに、人としての「優しさ、真つ当な判断力、行動力」を身につけさせたいとの考えからです。教員としてなすべき「薫習」を実践中です。その成果は、子どもの姿で出てきます。